

---

**空を飛べたらいいのになぁ。**

マーフィー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空を飛べたらいいのになあ。

### 【Nコード】

N4193T

### 【作者名】

マーフィー

### 【あらすじ】

「空を飛べたらいいのになあ」が口癖の主人公と、彼と共に行動する主人公の親友。二人の間に絆はない。だけれどそれとは別の何かが彼等の間で友情というものを作り上げている。その結果がこの旅である。

のんびりと、穏やかに、特に大きな何かを目指して旅をしているわけじゃない。

それでも足音は鳴り、今日も彼等は旅を続ける。

だって暑いし、風を受けたら心地良いだろうから。（前書き）

初めまして、マーフィーと申します。

この小説はかなり怠慢、かつふざけた性格をした主人公が、親友と二人で旅をする物語です。

のんびりとしていて盛り上がりもない小説になると思いますが、穏やかな小説になればいいな、と。

「空を飛べたらいいのになあ。」が口癖の主人公と、軽いツッコミ担当の親友のコンビ。

実際にいたら社会的に生きていけなさそうな性格の二人組みですが、暇な時にでも読んでいただけると嬉しいです。

のんびり穏やかに書いていきたいです。

だつて暑いし、風を受けたら心地良いだらうから。

「はああ」

「何だい、溜め息なんてついて」

「いやあ、別に？ あーあ。空を飛べたらいいのになあ」

「またそんなこと言つて」

二人の青年がゆっくりと山道を歩いている。先程の会話はこの青年達がしていたものだ。

山道は狭く、長い草が沢山生えている上に、ごつごつ歩いて歩くにくい。

「だつてさ、空飛べたらこんなごつごつした所歩かなくなつていいんだし」

「まあそれはそうだけどね。ていうかちょっと暑いね」

「まあ確かになあ。空を飛べたら風が身体に当たつて気持ち良さそうだけどさ」

「だけど空にいたら直射日光を全身に浴びることになるよ」

「お前のんびりしてるくせに変なところで頭の回転いいのな」

「一言、いや二言多いよ。そこまでのんびりしてない。そして変なところで、つて何だい」

二人はほんの少し会話を交わしてからまた前を向き、二人揃つて溜め息をついた。

先程空を飛べたらいいのになあ、と発言した青年の名前は、ディオン・クロフォード。

男性ではあるが、赤い髪は少し長めであり、肩まであと数センチ、といった感じである。

服装は灰色を基調とし、軽くて薄い布を何枚も重ねた造りになって

いて、細かい気温の変化にも対応できるようになっている。ただ、荷物が多くなる。

そしてもう一人の青年の名前はルース・リオン。

彼も男性であるが、髪はデイオン以上に長い。女性とも勘違いされそうな、腰ほどにまである金髪を頭の後ろの、高いところで一つに束ねている。

黒を基調とした薄い布で作られた服の上に、厚い布でできた紺青の上着を着ている。細かい温度調節はできないが、荷物は少なく済む。

「俺何枚か脱ご。ちょっと待ってな」

「はいはい。で、それを脱いで腕に抱えて持つていくのかい」

「別にいいじゃんかよ。お前こそそんなに暑くないのかよ」

「確かに少し暑いけれど、僕は君ほど温度変化に騒いだりしないよ」

ルースは実際温度変化に強く、今の薄い服の上に一枚の上着を羽織ったままの服装で零度までなら耐えられる。また真夏でも汗が少ない。

温度の変化はちゃんと感じられるのだが、デイオンほど敏感でなく、また今のように暑くてもそこまで暑がる素振りを見せない。本人が我慢強いのもある。

「何だっけ、その上着。前に滞在した街で買ったやつだろ」

「ポンチヨ、というらしいよ。正直このフードにはあんまり必要性を感じないけどね」

「暑そうだな、それ。素材からして」

「涼しくはないよ、丈夫なのはいいんだけどね」

ポンチヨには厚みのある丈夫な布が使われており、白い刺繍で模様

が入っている。

シンプルなデザインではあるが、派手なものを好まないルースには丁度良い。

ディオンはふーん、と返事をしながら、そのポンチョを眺める。同時進行で自分の上着を脱ぎながら。

「さて、と。もう一枚脱ごうか、どうしようか。なあ、俺はどうするべきだと思う、ルース」

「君の体感温度を僕が知っているはずがないだろう。自分の体感温度と体調で決めるべきだ」

「いや何かもう一枚脱いだら肌寒いけどでも今のままじゃ暑いかな、って言う微妙なところでさ」

「じゃあもう一枚脱いだらいい。歩いていたら暑くなってくるからね」

「そっか、なるほどなるほど。じゃあもう一枚脱ぐか」

そうやってディオンはもう一枚服を脱いだ。脱いでから一瞬肩を震わせ、両手で自身を抱きしめるように肩を擦る。

ルースは呆れたような目で親友が身に着けている衣服に目をやる。そしてわざとらしく溜め息をついた。

「ん？ 何で今溜め息なんかついたんだよ」

「いや、この服をどうするのかな、ってね」

「そりゃあ無理矢理詰め込むさ」

「反論ばかりするようで悪いけどね、今はまだ日が高い。一枚や二枚は持って歩いてもいいと思うよ」

「おお。なるほど」

感心したように頷き、無駄に多い衣服を鞆に詰め込むディオンを、またもルースは呆れたように見ていた。

そして再び溜め息をつくが、今度は自然に漏れてきたような印象を受けた。

「今度は何だよ」

「いや、名前と比べて随分と暑苦しいな、と思ってね。その服装」「名前は親がつけたものだから関係ないだろ」

ディオーンという名前には海という意味があり、涼しげな印象を受けるが、その名前を持つ本人は、何枚も重ね着をし、しかも赤い髪をしている。

こいつの両親はつける名前を間違えたんじゃないかと、ルースは呆れた目をしたまま考えた。

そこでディオーンがよし、といいながら立ち上がり、荷物を担ぎ始めたので、ルースも一時的に降ろしていた荷物を担ぎなおした。

「さてと、あとどれくらい歩けばいいんだよ」

「地図と僕等の頭が正しかったら、そうだね、あと二時間くらい歩けば街が見えてくるはずだよ」

「何て言ったっけな、その街。ティンダル、で合ってるか？」

「うん、合ってるよ。工業とかが盛んな街みたいだね」

「そこで銃弾もいくらか買っとかないとな」

ルースは頷いて、地図をポケットにしまい歩き出した。その後ろをディオーンが親を追う子供のように追いかけていく。

こうして二人は今日も旅を続ける。そしてこれが二人の日常である。



だつて暑いし、風を受けたら心地良いだらうから。 ?

「おいルース、まだ歩くのかよ」

「僕等の頭と地図が正しければあと三十分くらいで見えてくるはずだよ」

「あー、俺そろそろ疲れたんだけど」

「僕だつてそうさ。そんなに疲れた疲れた言つてると、無駄に疲れた気分になると思うけど」

「んなことないつて」

そこで二人の真正面から少し強めの風が吹き、二人は風によって舞い上がった砂煙に反射的に目を瞑つた。

ばさりと衣服が舞い上がり、顔に触れる。ディオンはそれを無理矢理手で押さえつける。

ルースはそこで何かに気付いた。風によって起こる空気が木や草を叩く音に混じつて何か別の音が聴こえる。

自分の喉からも発することができそうな、だけれど真似しきれない、グルグルという音。

ルースはつい腰のベルトのホルダーに手を伸ばし、音源に向かって発砲した。

ルースは警戒心が強すぎるのか、すぐ発砲してしまう。全く警戒しないよりは良いのだらうけど、悪い癖とも言える。何故なら銃弾の消費が多くなるためである。

風がまた緩やかになってから、二人は目を開けた。少し離れた場所に何か黒いものがある。ルースはそれを観察し、熊だった、とだけ言った。

ディオンは銃声だけしか聴こえていなかったらしく、不思議そうな顔でルースに疑問を投げかけた。

「おい、今何があつたんだ？ てかお前今絶対銃使つただろ。しかも何で熊が倒れてんだよ」

「質問が多すぎるね。少し落ち着きなよ」

ルースは混乱して自分に問い詰めてくるディオンの溜め息をついた。

「見ての通りだよ。何か唸り声が聴こえてきたから発砲したんだ。狼が何かと思つたけど、どうやら熊だつたみたいだね」

「お前目に砂入るぞ。よく開けてられるよな」

「いや、目は閉じていたよ。ただ僕は耳が良いからね。君が聴こえない音だつて聴こえるし、音源の位置も把握できる」

「はいはい、そうだった。お前は耳が良いんだつたな。悪かつたな、耳が悪くて」

「何でそこで機嫌を崩すんだい。目なら君の方が良いじゃないか」

ルースはあまり真面目に相手にせず、すぐに熊の近くまで寄つていった。

しばらく観察してから、軽く演技っぽい大袈裟な仕草で残念そうな顔を作る。

「ああ、残念だ。血が毛に染み込んでしまった。綺麗に毛皮を採れたら良かったんだけど」

「別に背中の方は染み込んでないし、それでいいじゃん」

「まあ腹の方にも染み込んでいない部分はあるし、そこも採ろうか」

「どうせなら頭を撃てば良かったのに」

「さすがに目を瞑って頭的位置まで推測できないよ」

肉を切らないように首の辺りに二つ、浅く傷をつけ、そこから剥がすように毛皮を採っていく。

毛皮を剥がされた熊は、頭の部分を除いて判別が相当難しい状態に

なっている。

「に、してもどうして熊が俺等に襲い掛かるうとしたんだよ」

「さあね、食糧ならまだあっただろうに」

「……いや、食糧は無いみたいだけどな」

「は？」

ディオンは森を見渡し、一本の木を指した。その木には果実が少ししか実っておらず、その下には腐り落ちているものもある。

「あと、たまにだけど枯れてるやつもあんじゃん」

ディオンはそう言うと別の木を指した。その木には既に葉がついておらず、表面は木が元から持つ茶色が灰色に濁っている。

「確かに。この枝も、何かが違う。かなり柔らかくて折れやすい。

流石、目だけはいいからかな、観察力はあるね」

「だけ、って何だよそれ」

「あとは木が少し減ってきてるような感じがするね」

「無視すんなよ」

ディオンはむすつとした顔をしながら頷いた。

陽が木の葉の間から沢山射し込み、二人に降り注ぐ。

ディオンは暑い、と一言呟いた。ルースも暑くなってきたのか、ポロンチョを脱ぐことはしなかったが水を一口飲んだ。

「お前暑いんだったら脱げばいいじゃんかよ。俺もう一枚脱ごうかな」

「いや、こんなに暑いのにあんまり汗かいてないだろう、君。つまりはこの辺りは乾燥してるんだ。無駄に肌を出すと余計に体内の水

分が失われるよ」

「うわ、こんな暑いのに脱げないとか。うええ、脱ぎたい」

「しかし数時間前までは肌寒いと言ってもいいほど涼しかったの  
ね。何だか砂漠の気候みたいだ」

「……いや、これもう既に砂漠なんじゃ」

「え？」

そう言うディオンの向いている方向には数本の木、それが所々にバ  
ラバラに立っている。

木が減っていることは誰の目から見ても確実だった。

瑞々しい果実が実っている木なんて、既に周りに一本も無かった。

更に追加して、足元には枯れ草ばかり。環境に対応もできず、水分  
も得られなかったのだらう。

「もしかしてだけどさ、お前、地図の読み方間違えた？」

「その可能性もあるかもしれないね」

「ちよつと地図見せてな」

ディオンはルースの持つ地図を覗き込んだ。そしてしばらくしてか  
ら、無表情で顔を上げた。

「目印がない」

「砂漠だからね。でも方位磁石はあるから、それで少しは何とかで  
きるかもしれない」

ルースは方位磁石で方角を確かめながら、再び地図を読み取り始め  
る。

「この方角を南とした場合、ここに森林があつて、僕等は森林を出  
て少ししか歩いてないから、合っているはずなんだ」

「てことは地図が間違ってるのか？」

二人は立ち止まった。しばし沈黙が流れ、二人は顔を見合わせた。

だつて暑いし、風を受けたら心地良いだらうから。 ?

「よく考えてみたら、まず森からいきなり砂漠になっていること自体有り得ない」

「まあ、それは確かにそうだけどさ。でも砂漠だろ、どう見たってディオンは後ろを振り返った。

少し前まで自分達が歩いていて、深い緑色の山がすぐ後ろにあった。

「この地図と僕等、両方が正しかった場合、僕等の目の前には湖があるはずなんだ」

「でもないってことはやっぱり間違えてんのか」

「僕等か地図か、それか両方ともか、ね」

そこでまた強い風が吹き、二人はまた目を瞑った。

ディオオンが風の中で声を挙げたが、ルースは風が緩くなるまで口を開くことをしなかった。

そして少しして風が優しくなり、普通に話せる状況になってから、ルースはようやくやく口を開いた。

「どうかしたのかい、ディオオン」

「砂が目に入ったんだよ。うわ、しかも痛い。何だよこの砂」

「どれ、見せてごらん」

ルースがそう言うと、ディオオンは左目、と呟くように言った。

ルースはそれに従い左目を覗きこむようにして見た。

「うん、赤くなってるけど擦ったりしたのかい？」

「まだ擦ってないっての」

ルースは荷物から小型のタンクを取り出し、その中の水を半分程デ  
イオンの顔にかけた。

「うわ、何だよいきなり」

「決まってるじゃないか。洗浄だよ」

「だからっていきなり水かけるなよ……」

デイオンは手を自分の顔まで運び、途中で止めた。

ほぼ無意識に目を擦ろうとしていたらしく、それに気付いて手を止  
めた、といった感じである。

「にしても何で砂が入っただけでこんな痛くなんだよ」

「さあ。粒子が粗いのもかもしれないね」

ルースはそう言うと自分の足元を見つめ、砂を手で掬った。

「この地域の砂は随分白いなだね」

「あ、確かに。山道はこんな白くなかったよな」

「しかも砂漠の砂にしては随分と塊が多い」

と、そこでまた風が巻き起こり、二人の視界を覆う。

デイオンはすぐに目を瞑ったので今度は砂の被害を受けることはな  
かった。

ルースもすぐに目を瞑ったため、砂が目に入ることにはなかった。

しかしルースは風が巻き起こる直前に溜息をついたため、その後息  
を吸い込んだ際舞い上がった砂も吸い込んでしまった。

いきなり口の中にジャリ、と音を立てる粉末が入ってきてしまい、  
その場で思い切り咳き込む。

今度の風は比較的早く落ち着いたため、二人ともすぐに目を開ける

ことができた。

「う、わあ、何だこれっ、うええ」

「えっ？ え、え、どうしたんだよ、ルース」

「……水、取って、くれない、かいつ」

「え、ああ、うん」

ディオンはタンクの中の水をカップに注ぎ、それをルースに手渡し  
た。

ルースはそれを受け取ると口の中に含み、吐き捨てる、と言った行  
為を数回繰り返した。

「ふう……。本当になんなんだろうね、この砂は」

「え、何か変な味でもしたのかよ」

「……かなり、しょっぱい。しょっぱいなんてものじゃない、塩辛  
いの限度を超えている」

それを聞いてディオンは少し興味を持ったが、砂を舐めたくないの  
と、先程のルースの反応を思い出し、自分の足元の砂から目を逸ら  
した。

怖いもの見たさにも限度があり、ディオンはそこまで怖いものに興  
味を持つ性格ではなかった。

「何で砂漠の砂がそんなにしょっぱいんだか」

「さあね。ところで今君が持っている地図を僕に渡してくれないか  
い」

「ああ、うん」

ルースはディオンの地図を受け取ると、真剣にそれを睨み始めた。  
ディオンは暑さのためか溜め息をついてその場に座り込んだ。



「しっかし暑いよな。やつぱ乾燥してんのかな、あんま汗かかないし。暑いつていうか陽が強いのか」

「うん、乾燥、陽、ねえ……」

ディオンの言葉を所々拾い、ルースはそれを口の中で繰り返す。

「乾燥、陽、砂、塩辛い……」

「ん？ もしもールース？ 何か考えが別の方向に突っ走ってるけど？」

「え、ああ、うん。そうだね、そうだったみたいだ。真面目に道を探さなくちゃね」

そう言った直後、ルースはあ、と声を挙げた。

「どうした？」

「もしかして、だけれど。僕等と地図、両方間違っていない可能性があるがある」

「え、それ本当かよ」

ルースは頷くと、地図を折り畳み、自分の足元を指差した。

ディオンは何がなんだか分からず首を傾げたが、ルースは呆れる様子を見せずに砂、と呟いた。

「いいかい、僕等の持っている地図は六年前に刷られたものだ。何かしら土地に変化があったって仕方ない」

「で、まさか湖が無くなった、という気じゃないだろうな」

「いや、無くなった可能性もある。それかかなり小さくなったか、だね。まあ、蒸発したってことだね」

分からない点が残るのか、まだ首を傾げるディオンにも、ルースは呆れる様子を見せない。

ルース自身もそこまで自身が持てず、外れている可能性の方が高いからである。

「いいかい、ここはかなり乾燥している。そして砂は塩辛い。恐らく、湖の水には少量の塩分が含まれていて、蒸発することにより塩になったんだ」

「……あ、もしかして砂が白かったのって、砂じゃなくて塩だったから、とか」

「あくまでも僕の考えだけだね。自信はないよ。目に入っただけで赤くなっただのも塩分の所為かもしれない」

「まあとりあえずルースの考えを正しいものとして考えた場合、俺等の目の前には既に涸れた湖があることになるんだな」

「だから地図に従った場合、このまま南に進めば街があるはずなんだ」

ルースは珍しく柔らかい笑みを浮かべた。ディオンもつられるようにして笑顔を作る。

つられたのもあったが、希望が見えてきたことも嬉しかったのだ。

「外してたらどうしようか」

「まあその時はその時だろ」

今度こそ呆れた表情を作ったルースを見て、ディオンは口角を上げた。

「旅には運も必要だからな」

「まあそれは同感だけだね」

そうして再び歩き始めた二人の少し遠い所で、塩分濃度の高すぎる水が日光を反射して輝いていた。

湖は確かにあり、それはどんだん乾いていったのだ。

それは二人の、特にルースの推測は正しかったことを示した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4193t/>

---

空を飛べたらいいのになぁ。

2011年10月9日03時33分発行